

国際開発工学専攻 修士1年

花岡研究室

祖田 真志

1. 派遣大学の概要

メルボルン大学は、オーストラリアの第二の都市であるメルボルンに所在する州立の総合大学である。1853年に設立され、各種世界ランキングで優秀な大学として評価されている世界有数の名門大学である。約4万7千人在籍している学生のうち、約3割は世界各国から集まってくる留学生である。また、メルボルン大学には20を超えるfacultyとschoolがある。その中には、音楽学部などの芸術分野なども含まれており、幅広い分野の学部、専攻がある。

2. 所属研究室での研究概要とその経過や成果、課題など

メルボルン大学留学中は、東工大での指導教官である花岡准教授に紹介していただいたThompson教授に研究指導をお願いした。留学中に行っていた研究では、内陸開発途上国が周辺国にある港湾へのアクセスとなる経済回廊上の交通インフラの質が低く、それが原因で内陸途上国への輸送費が高騰しており、経済成長の妨げとなっているということを受け、内陸国自身が国境をまたいで隣国の交通インフラ開発に参画できるようなスキームを開発することを計画していた。Thompson教授の専門分野が都市交通計画やロジスティクスであり、ステークホルダー分析に知見が深いことから、留学機関の前半は経済回廊の開発や運営がどのように行われており、どのような機関が関わっているのかを把握するため、国際機関、各国の関係機関、民間の輸送業者などとの関係性をステークホルダー分析を通して明確にした。その後は、内陸国と周辺国の港湾を結ぶ複数のルートの中からどのルートを選択するのかの内陸途上国の荷主の意思決定が各ルートの維持管理・運営に関わっている公的機関やルート上の都市の回廊の質の向上させるためのプロジェクト実施の有無の意思決定にどのように影響するのかを予測できるようなシミュレーションモデルの構築に努めた。結果として、滞在中にこのモデルの構築を完全に終えることはできず、帰国後も適宜連絡を取りながら、助言をいただくというかたちになった。

3. 所属研究室内外の活動・体験)

メルボルン大学ではこちらの大学のように同じ指導教官の学生が同じ部屋に集まるという

研究室という概念がない。私の所属していたDepartment of Infrastructure Engineeringでは、基本的に修士の学生にデスクが与えられることはなく、同じ専攻の博士課程の学生とリサーチアシスタントが各々のデスクがある学生部屋で研究をしている。私の場合、交換留学生や短期間の研究者のための部屋にあるデスクで研究をしていた。私の留学中、同じ部屋にはスペインの大学から2ヶ月のみメルボルン大学に研究のため滞在していた教授や同じように短期間研究のためメルボルン大学にきたナイジェリアからの研究者の方と一緒に部屋を使用していた。また、留学中には研究以外に私の専門分野に関係のあるシンポジウムなどへの参加などの学業活動も行った。

留学中にはメルボルン周辺の都市へも足を運んだ。ここでは、その中の二つの写真を紹介する。一つは、メルボルンの南西、インド洋沿岸を走るグレート・オーシャン・ロードを走行していた時の写真である。もう一方は、オーストラリアの南に位置する島、タスマニア州に観光に行った時の写真である。どちらも日本では体感できないような自然のスケールの大きさを実感することができた。特に、タスマニアではイギリスがオーストラリアに囚人を追放していた流刑地やアボリジニの博物館に行き、オーストラリアの歴史的背景を知る絶好の機会となった。



グレート・オーシャン・ロード



タスマニア クレイドル山

4. 留学先での住居（寮、ホームステイ等）、申し込み方法、ルームメイトなど

留学先では寮などには住まず、一般の人々とルームシェアをしていた。大学の提供する寮などは人気が高く、早い段階で予約をする必要があり、私の場合はこの留学が決定した時点で留学するまで日があまりなかったため、寮に滞在することは難しかった。一方、メルボルンではルームシェア・ホームシェアが一般的であるため、滞在先はすぐに見つけることができ、寮に滞在するよりも宿泊費が安く済む場合が多い。実際、学生同士がルームシェア・ホームシェアをしている場合が多い。

5. 今回の留学から得られたもの

今回留学を通して得られたものは、学業活動からだけでなく、日常生活か得られたものも多くあった。今回の留学では、博士過程の学生がまわりに多くいたという意味で普段の日本の研究室での環境とは大きく異なり、どのような次元でものを考える必要があるのか、どのようにものを考える必要があるのか、研究はどのように進めていくべきなのかなどを考えさせられ、学ばされる機会が多く、今後の研究活動にも大きな刺激となるだろう。また、学業活動以外にも、普段生活していて周りの人と交流する中で、今までの自分のものの考え方、固定観念にどれだけ囚われていたのかを気付かされた。日本にいるときは、文化的に同じバックグラウンドをもっている日本人と交流することが多くなり、そのような環境の中でどのようなことが世界的に見たときに普通で、どのようなことが異常なのかの判断をつけることは難しい。今回、移民などの割合が高いメルボルンで生活していく中で、自分が日本人であるということを嫌でも意識させられ、様々なバックグラウンドをもった人々と交流していくうちに、物事を柔軟にとらえ、適応していく力は徐々に身につけていったと実感している。